教科等研究会（小・中学校書写部会）
令和３年度　研究活動のまとめ

１　研究テーマ

書くことに意欲と喜びが持てる書写指導の在り方
～自ら気づき、高め、楽しんで日常生活に役立てる実践を求めて～

２　研究経過

第１回			第２回			第３回			第４回		
7／1	１4名	広安小	7／30	広安小	実践報告及び実技研修 田由美子教諭(蘇陽中) 藤川亜紀教諭(広安小)	１2／3	清和小	授業研 澤田稔教諭 (清和小)	2／8	広安小	実践報告会 (中止)

３　研究の概要

（１）研究の内容

昨年度までの研究をさらに進めていくために、今年度も引き続き同じテーマとし、サブテーマを日常生活につなげるものとした。

授業において、学習課題を明確化し、ポイントをつかんで練習ができるようにすることで、児童生徒はその時間の課題を達成し、文字が上達していく。その達成感により、それぞれが自分の書いた文字に自信が持てるようになると考える（「分かる・できる」）。そして、その自信が「書くことに意欲が持てる」ことにつながっていくと考える（「楽しい」）。

「自ら気づき、高め」とは、児童生徒が試書→気づく→練習→清書→評価という学習活動の中で、試書と手本の文字を比較し、学習課題を達成するためにはどのような改善が必要か、自ら気づき、考えるとともに、自分自身の課題も意識して練習し、より良い文字となるような作品作りに取り組むことと考える。「楽しんで日常生活に役立てる」とは、書写の学習で学んだことを自分のものとして、各教科の学習や生活の様々な場面（模造紙へのまとめや手紙、書き初め等）だけでなく、日々の文字を書く様々な場面で意識しながら積極的に生かす態度を育成することだと考える。

実技研修は、毎年会員からどのようなことを学びたいか意見を聞き、取り組むことにしている。今年度は、児童生徒の意欲を高めるための指導法について、文字や作品を褒める際の具体的な着眼点や褒め方等、効果的な範書や提示の仕方としてデジタル教科書の活用法、行書の書き方の法則等基本点画の筆遣いについて学びたいという意見が出された。そこで、デジタル教科書を活用した指導の実際や行書の書き方の基本法則、日常に生かす一方法として筆ペンを使った指導の実際等について、実技を通して学び、意見交換をすることにした。

研究授業は、小学校と中学校が毎年交互に担当し、相互の立場から意見交換する形で研究を進めている。しかし、小学校と中学校では、ねらいや授業内容がそれぞれ異なるため、１回の授業研究会では実践力の向上を図ることが難しい。そこで、年度末に、一人一人の授業実践を発表し意見交換を行う実践報告会を計画した。が、本年度は開催が叶わなかったため、レポート交換による実践報告とした。多くの実践例を持ち寄ることで、小・中学校の連携を図るとともに、書写の楽しさや喜びを味わわせる活動の工夫や、技術を高めるための指導法、日常生活へどうつなげていくか等、会員どうしで共有できると考える。

（２）成果と課題

実技研修は、蘇陽中の田教諭、広安小学校の藤川教諭の実践報告をまじえて行った。前半は、ＩＣＴ活用の観点からデジタル教科書を活用した指導の実際として、田教諭、藤川教諭の実践例から学んだ。教科書や指導書には活用場面が記号で示してあり、教科書と関連させて活用しやすいものであることがわかった。また、タブレットに取り込み、机間指導しながら便利に扱う方法、リピート機能も使いながら基本の点画の筆遣いを範書として連続提示する方法について知り、児童生徒に基本事項を理解させたり、個々の書く力の差を埋めたりするために非常に有効であることがわかり、参加者の意欲も大いに高まった。

後半は、広安小の藤川教諭の実践報告と合わせて実技を行った。行書の点画の変化や基本法則について、夏休みの作品募集の課題を実際に書いてみることで確認した。また日常生活に生かす一方法として筆ペンで自分の名前を書く活動を行った。互いの疑問や悩みをその場で出し合いながら、より実用性の高い実技研修ができた。

今回の実践報告及び実技研修で、参加者からは、「日頃の書写指導で悩んでいる部分を、実践を踏まえながら解決でき、書く楽しみを久々に味わうことができた。」「頭で理解していても実際に書くとなると難しさも感じ、児童生徒もきっと同じなのだろう。」といった感想が出され、参加者にとって、２学期以降の授業改善や指導の工夫へ意欲が高まるような有意義な研修となった。

４　実践事例

（１）授業の概要

《授業者自評》

・「まがり」と「そり」を含む漢字をなかま分けする活動で、「画に注目して」という発問が、児童にとって分かりやすい発問にならず、戸惑わせた。
・「まがり」「そり」をどう書くのか、話し合い活動をさせた際、児童がそれぞれ違う文字を持ち寄って話し合おうとしたため、書き方の違いがまとまらなかった。
・まとめでは、筆の進む方向に着目させた。「『まがり』は筆を進める方向を変える、『そり』は変えないとわかった。」「まがりとそりは似ているとわかった。」等のまとめの言葉が児童から聞かれたので、最後には書かせて、「まがり」と「そり」の書き方の違いを理解できたと実感させて終わりたかったが、時間が足りなかった。

《研究協議の内容》

・導入で、普段児童がノートに書いている文字を使うのも有効である。本時の授業後に書かせた文字が変化し、児童が自分の文字の変化や伸びを実感し、普段のノートの文字にも生かしたいとの思いを持たせることができる。
・画に注目することを意識させるためには、向きや点・折れ・はらい等既習の筆遣いを復習するとよかった。既習の「折れ」を表す「カックン」という言葉は、「そり」や「まがり」には使えないので、本時で注目すべき点を明確にすることができるのではないか。
・話し合い活動の中で出た「すべり台みたいな形」という児童の言葉を、まとめの文言に使ってもよかったのではないか。どこに目を向けて、どう表現させるかは難しいが、「すーっ」「すべり台の形」等、児童が知っている物に当てはめた言葉を使ったり、動作化したりすることは有効である。
・「まがり」「そり」の違いを焦点化させるために、動作化させるなど、体で表現させるとよかったのではないか。部分を示す掲示教具はとてもわかりやすく、有効であった。
・文字は文化であり習慣であるので、「まがり」と「そり」を違えて書いた時には違和感を感じるように、小さな間違いを見逃さず、正しく書くことを積み上げて、習慣化させたい。

（２）学習構想案

第３学年　国語科　書写学習構想案

日時　令和３年１０月２２日（金）　第５校時
場所　清和小学校　３年生教室
指導者　澤田　稔

１　単元構想

単元名	「曲がり」と「反り」
単元の目標	○「曲がり」「反り」の書き方を理解し、正しく書くことができる。

単元の評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	○「曲がり」「反り」の書き方を理解している。 ○「曲がり」「反り」を正しく書いている。	○「曲がり」「反り」の書き方を、ほかの文字にどのように生かすか考えている。	○学習したことを生かして書いた文字を見直し、「曲がり」「反り」の書き方に気を付けて、進んで書こうとしている。

単元終了時の児童の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）
「曲がり」と「反り」の書き方を理解し、「曲がり」と「反り」のある漢字を生活の中で書くときに、正しく書こうとする児童

単元を通した学習課題 （単元の中心的な学習課題）	本単元で働かせる見方・考え方
「曲がり」と「反り」の違いを探そう。	「曲がり」では、止めないで筆の進む方向を変えること、「反り」では、止めないで全体を少し膨らませるように書くこと。

指導計画と評価計画（４時間取扱い　本時１／４）

過程	時間	学習活動	評価の観点等　★は記録に残す評価の場面で　「具体の評価規準」
一	１	○「曲がり」と「反り」って何だろう？（本時）	★【知①】（発言・ワークシート） ○「曲がり」「反り」の書き方の違いについて班で話し合い、「曲がり」と「反り」の書き方を理解している。
二	２	○「曲がり」と「反り」を毛筆で書いてみよう。	★【知②】（発言・作品） ○「曲がり」と「反り」のそれぞれの書き方に注意して、正しく書いている。
三	１	○「曲がり」と「反り」の違いを考えながら書こう。	★【態①】（発言・作品） ○学習したことを生かして、書いた文字を見直し、「曲がり」と「反り」の書き方に気を付けて書いている。

２　単元における系統及び児童の実態

学習指導要領における該当箇所(内容，指導事項等)

小学校学習指導要領国語科第３学年及び第４学年　　我が国の言語文化に関する事項
エ（ウ）毛筆を使用して点画の書き方への理解を深め、筆圧などに注意して書くこと。

教材・題材の価値

本題材では、「曲がり」と「反り」の書き方を学習する。硬筆では分かりにくい「曲がり」と「反り」の違いを、毛筆で書くことによって児童に意識づけることができる。

本単元における系統

一年「「おれ」「まがり」「そり」」
○漢字の「折れ」「曲がり」「反り」の書き方を理解し、正しく書くことができる。

二年「点画の名前」
○漢字の点画の名称と書き方を理解し、正しく書くことができる。

三年「「はらい」」
○「左払い」「右払い」の書き方を理解し、正しく書くことができる。

三年「「曲がり」と「反り」」
○「曲がり」「反り」の書き方を理解し、正しく書くことができる。

三年「ひらがな」
○平仮名の書き方を理解し、正しく書くことができる。

児童の実態（単元の目標につながる学びの実態）

■本単元を学習するにあたって身に付けておくべき基礎・基本の定着状況

調査内容	書けている	書けていない
「折れ」を正しく書けている。（山）	１７人	０人
「曲がり」を正しく書けている。（光）	１１人	６人
「反り」を正しく書けている。（心）	１０人	７人

■本単元の学習に関する意識の状況

調査内容	◎	○	△
文字を書くことは好きですか。	２人	１３人	２人
書写の授業は好きですか。	５人	１１人	１人
書写の授業で学んだことを、日常に生かしていますか。	６人	１０人	１人

■考察

「おれ」は日頃から意識して書けていることが分かった反面、「曲がり」と「反り」は意識して書いていない児童が数名いることが分かった。　また、文字を書くことを苦手としている児童が数名、書写の授業を好んでいない児童が数名、学んだ事を日常生活に生かしていない児童が数名いることが分かった。今回の書写の学習を通して、それぞれの画の書き方を理解し、他の字に生かして書けるような学習を行いたい。また、日頃から、文字を書く楽しさを感じてもらえるような取り組みが必要である。

３　指導に当たっての留意点

○「曲がり」と「反り」の筆遣いの違いに気づかせるために、「折れ」「曲がり」「反り」の順番に範書する。
○「曲がり」と「反り」の違いについて理解がはっきりしない児童については、実際に児童の手をとって、一緒になぞり書きを行う。
○いつでも「反り」を確認できるように、デジタル教科書の「反り」の書き方を流しておく。

４　本時の学習

（１）目標

「曲がり」と「反り」の書き方の違いについて気づいたことを話し合い、「曲がり」と「反り」の書き方を理解することができる。

（２）展開

過程	時間	学習活動 （◇予想される児童の発言）	指導上の留意事項 （学習活動の目的・意図，内容，方法等）	備考
導入	5分	１　漢字の仲間分けをする。 ２　本時のめあてを確認する。 **【めあて】「曲がり」と「反り」の書き方について考えよう。** **【学習課題】「曲がり」と「反り」の書き方の違いを見つけよう。**	○「兄」「光」、「心」「風」、「日」「山」の漢字を提示し、「曲がり」「反り」「おれ」に着目させる。注目して欲しい画を色付けしておく。	・ワークシート
展開	30分	３　「曲がり」と「反り」の書き方の違いについて、考える。 ①「曲がり」と「反り」の書き方について、気付いたことをワークシートに書く。 ②ワークシートに書いたことを、班で話し合う。 ◇曲がりは、おれのように曲がって、最後跳ねているよ。 ◇曲がりはかくかくしてるよ。 ◇反りは、斜めに進んで跳ねているよ。 ◇曲がりと違って、すーっと進むね。 ４　班で話し合ったことを、全体で共有し、「曲がり」と「反り」を書く。 **【期待される学びの姿】** **「曲がり」と「反り」の書き方の違いを理解し、文字を正しく書くことができる。**	○「曲がり」と「反り」の書き方の手立てとして、「おれ」の書き方を想起させ、進む方向や穂先の向きに注目させる。言葉で表せない児童は、考えを聞き出し、一緒に言葉に直す。 ○班で話し合うときは、ホワイトボードに考えを書かせる。 ○全体で共有するときには、班の代表の児童に実際に書いてもらい、ポイントを教科書の「書写のかぎ」で確認する。 **【具体の評価規準】知①** **○「曲がり」と「反り」の書き方の違いに気づき、書き方を理解している。** **（方法：発言・ワークシート）** 【到達していない児童への手立て】 ○「曲がり」と「反り」を書く際に、個別指導（矢印で表現）を行う。	・教科書 ・プロジェクター ・デジタル教科書 ・ホワイトボード
終末	10分	５　本時のまとめと振り返りをする。 **【まとめ】「曲がり」は、筆を止めないで進む方向を変えて書き、「反り」は、筆を止めないで全体を少し膨らませながら書く。（児童の言葉を使ってまとめる）**	○本時の振り返りを行う。時間があるときは「曲がり」と「反り」のある漢字を考えさせる。 ○硬筆では分かりにくい「曲がり」と「反り」の違いを、次時では筆で確かめさせる。	・ふり返りシート

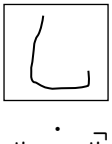
【板書計画】

プロジェクター

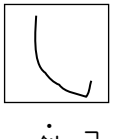
「曲がり」と「反り」

め：「曲がり」と「反り」の書き方について考えよう。

せ：「曲がり」と「反り」について



「曲がり」
・「おれ」のように、曲がってはねる。



「反り」
・斜めに進んで、はねる。

い：ちがいをいしきして書いてみよう。

ま：「曲がり」は筆をとめないで進む方向をかえ、「反り」は筆を止めないで全体を少しふくらませる。

わ：べつの漢字も書いてみよう。